

1. 職種と職歴（現在の職場）。

医師	2名：15年（12年）、8年（3年）
診療所看護師	2名：25年（7年）、19年（5年）
救急救命士	6名：18年、15年、14年、10年、5年、3年、 計10名

2.

1) 双方向の情報交換することで医師（看護師）のメリット

●医師・看護師

- ・搬入後の処置、検査の準備がしやすい。×3
- ・指示を適切に伝えられる。

●救急救命士

- ・詳しい情報を得ることによって診療所内での対応がしやすくなる。×3
- ・患者情報をより詳しく聞くことができる。×2
- ・救急隊へ処置等に対し指示を出すことができる。
- ・現場での情報を詳細に知れる。
- ・リアルタイムの双方向通信のため医師が知りたい情報をとれる。

2) 双方向の情報交換することで救急救命士にとってのメリット

●医師・看護師

- ・救命士の不安や心配事をサポートしてあげられる。
- ・スキルアップ、コミュニケーションアップにつながる

●救急救命士

- ・医療機関から得られる傷病者情報。×4
- ・処置、診察に対する救急救命士の安心感。×3
- ・急性期かどうかの判断材料になる
- ・患者さんの言っている情報の成否判断ができる。
- ・女性の心電図測定等に苦勞するが医師の指示でと言うと抵抗が少ない。
- ・直接医師とやり取りしているため診療所到着後の申し送りがスムーズ。
- ・双方が情報、意思疎通がとれるため齟齬が少ない。
- ・ドクターヘリ要請の判断が付きやすい。

3) 双方向の情報交換することで搬送患者にとってのメリット

●医師・看護師

- ・より適切な救急隊活動につながる。
- ・初期から医師の介入があるため診療の質が向上する。
- ・診療の質向上でアウトカムの向上、生存率があがるのでは？

●救急救命士

- ・医療機関と患者の信頼関係を深め、患者さんが安心する×4

- ・医師指導の下で問診を車内で行うため診療所到着後に同じことを何度も聞かれない。
- ・家族からの要請で本人が搬送拒否している場合に直接医師に説得してもらう。
- ・苦痛の軽減や診療所での処置までの時間の短縮につながる。

4) 今までの双方向の情報交換で良かった具体例

●医師・看護師

- ・DNAR 指示を伝えられた。
- ・全脊椎固定の指示
- ・酸素投与の指示

●救急救命士

・高齢者夫婦の 2 人暮らしで、夫の胸痛での要請であったが、妻の身の回りの世話は夫がしている事実を知る診療所側から、「妻も一緒に連れてきて診療所で一時受け入れる」という提案があった。

・もともと脳梗塞後遺症がある方がヘルパーから様子がおかしいという通報で要請、現着後本人はいつも通りと主張していたが、所見をとり診療所医師に相談すると顔面の麻痺は新たな症状ということがわかり、急性期の脳疾患と判断でき救急対応できた。

・急性期の脳卒中と考え Dr へり要請を考えていたが、診療所に連絡したところ 3 日前の往診で脳梗塞の症状があり、急性期ではないので Dr へり要請ではなく、診療所に連れてくるように指示された。

- ・その他、最近の診療所受診内容の情報から判断に迷わずに活動で来た症例が多数あり。